

第4回 楽しい世界と出会う

別府 哲 (岐阜大学)

べっぴ さとし/岐阜大学教授。自閉症児・者の発達や指導をライフサイクルを通して研究。著書に『自閉症児者の発達と生活—共感的自己肯定感を育むために』、『障害児の内面世界をさぐる』(以上、全障研出版部)など。現在、全国障害者問題研究会常任全国委員。



●モノと一体になる楽しさ

「夜になって眠る前、僕は天井をじっと見つめることがあります。すると、天井との距離が縮まって、自分と天井が一体化したような感覚に陥るのです」。

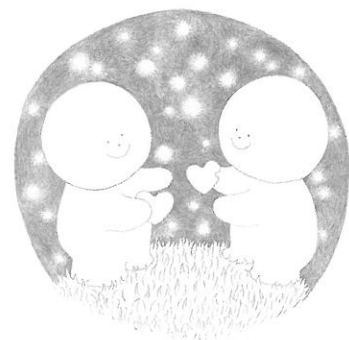
これも先に紹介した東田さんが書かれている一節です。自分が天井というモノと一体になる感覚が、しばしばあるといいます。自閉スペクトラム症の当事者であるドナ・ウィリアムズさんはNHKの番組で、「人間よりもはるかに信頼できて気持ちを通じ合うもの」としてベルベット(表面にやわらかな毛羽のある絹織物)を挙げています。「ベルベットにふれば、私はベルベットになることができます。息をのむほどの美しさと完璧さの一部になることができます」。ドナさんは彼女の世界の友だちとして次のことも紹介しています。「空中に浮かぶ丸い粒子をみつめれば、私は粒子になることができます。モノの一部になることができます。くつろいだ気持ちで世界が回っていくのを見ることができると。空中の粒子になれる楽しさは、5月号で紹介した当事者の森口奈緒美さんも、語っておられました。

こういったことは、自閉スペクトラム症者の自伝では、しばしば書かれています。ここではそれを、モノと一体になる感覚としておきます。しかしこの感覚は障害をもたない人には理解しにくいいため、これまであまり注目されてきませんでした。一方このモノと一体になる感覚が、とても好きで楽しいと感じる自閉スペクトラム症児者は決して少なくないと考えられるのです。

●自分と他者、自分とまわりの世界 —未分化から分化へ—

モノと一体になる感覚とはどういうものでしょう。そ

自閉スペクトラム症児者の 心の理解



●自分が楽しいと感じる世界

みなさんが感じる楽しい世界には、どんなものがあるでしょう。身体を動かす、音楽を聴く、本を読む、友だちと会う、何もせずぼーっとする…。それはまさに十人十色で、一人ひとり違ってよいものです。一番大切なのは、自分が楽しいと感じることであり、人から押しつけられるものではないということなのでしょう。

楽しさは一人ひとり違うはずなのに、障害をもたない人の場合、楽しい世界を共有できる自分以外の人に出会うことはよくできます。同じ漫画や音楽が好きだったり、スポーツの話題で盛り上がることもできる相手です。ところが自閉スペクトラム症児者は、楽しい世界がユニークなため、それを共有できる人と出合いにくいことがあるのです。

「僕は、池に小石を投げた時にできる波紋にうっとりしたり、時間も忘れ、走っている自転車のタイヤの回転に注目したりします…」。

これは自閉スペクトラム症の当事者であり作家活動もされている、東田直樹さんの本の一節です。自閉スペクトラム症児には、タイヤだけでなく換気扇など、回るものを見るのが大好きな子はよくいます。障害をもたない子でも小さいときにそれが好きな子はあるでしょう。しかし年齢が上がると、それを「時間を忘れ」るほど楽しめる人はあまりいません。なので、東田さんのように、青年になってもタイヤの回転に注目し続ける姿は、時にこだわりととらえられたりするので。

このように、自閉スペクトラム症児者にとっての楽しい世界やユニークな楽しみ方のなかに、障害をもたない人には想像しにくいものがあります。そしてその理解のしにくさが、そういった言動をこだわりや問題行動ととらえさせやすくすることがあるのです。今回は楽しい世界のユニークさについて、例をもとに考えてみます。